

今回のイッピン 小さな矢じり

発見された2点目の矢じり

どなたでも知っている「矢じり」。

その名前の通り、弓矢の「矢」の先端につけて、狩りに用いられた道具（石器）です。狩りをして暮らしていた縄文時代の遺跡からはたくさん出土します（図1）。

しかし、村北遺跡からはこれまで1点しか出土していませんでした。そのため、「なぜ矢じりが出土しないのか」、「何をするためにここに来たのだろうか」、ずっと私たちを悩ませてきました。

ところが、資料整理をすすめる中で、発掘調査時に回収した土を洗浄・選別したところ、2点目の矢じりが発見されました（写真1）。

今回は、この矢じりに注目して、縄文人たちが村北遺跡で何をしていたのか、少し考えてみたいと思います。

小さな矢じりの特徴

今回、新たに発見された矢じり①は、長さ1.3cm、幅1cm、厚さ2mm、重さ0.4gです。とても小さく軽いものです。これまで見つかった矢じり②もほぼ同じ大きさになります（図2）。

ともに、茎（なかご）と呼ばれる突起を持たない「無茎鏃（むけいぞく）」というタイプの矢じりです。このタイプは縄文時代後期頃までたくさん作られますが、その後は茎を持つ有茎鏃（ゆうけいぞく）に変わっていきます。

この矢じり①が発見された土は、縄文時代中期末～後期初頭の竪穴建物を埋めた土を回収したもので、おそらく、村北遺跡のなかでも古い時代に使われていたと思われます。

矢じりの先端部分は、2点とも欠けています。このことから、これらの矢じりは狩りに使われたものであると考えられます。

小さく軽い特徴から、大型動物ではなく、小型動物・水鳥などを捕るために使われたのでしょうか。

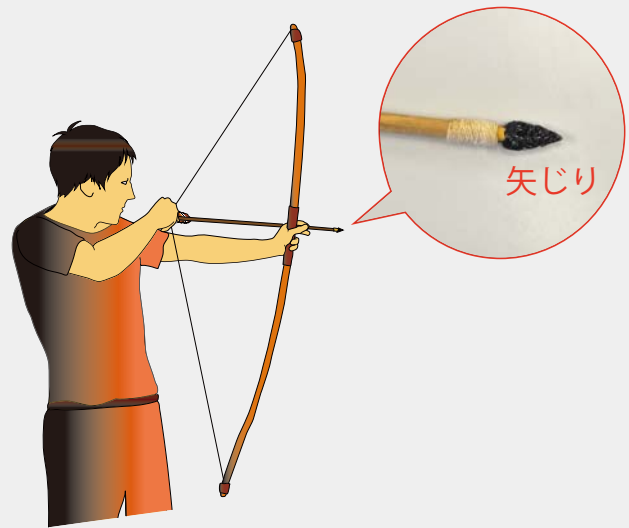


図1 矢をつがえる人（イメージ図）



写真1 新たに見つかった矢じり（矢じり①）



図2 矢じりの形と種類

矢じりが発見された場所

これまでの調査・資料整理で、村北遺跡は長期間暮らしたムラではなく、短期的に場所を変えて滞在したキャンプであったことがわかってきました。2点の矢じりは、どの場所から出土したのか見てみましょう（図3）。

先ほどご説明したように、矢じり①は調査区西端の竪穴建物を埋めた土のなかから出土しています。いっぽう、矢じり②は東端から発見されています。この2ヶ所は、村北遺跡でもっとも古い（縄文時代中期前半～後期前葉）活動痕跡が認められる場所になります。

このように、矢じりが見つかった場所は、村北遺跡の中でも時代が古い範囲になることが見えてきます。古い時代に村北遺跡にやってきた縄文人たちは、簡易な家にキャンプをして、狩りをして暮らしていたのでしょうか。ところが、時代が新しくなると矢じりは消え、木の実などを調理する石器だけが出土するようになり、「矢じり離れ」が進みます。

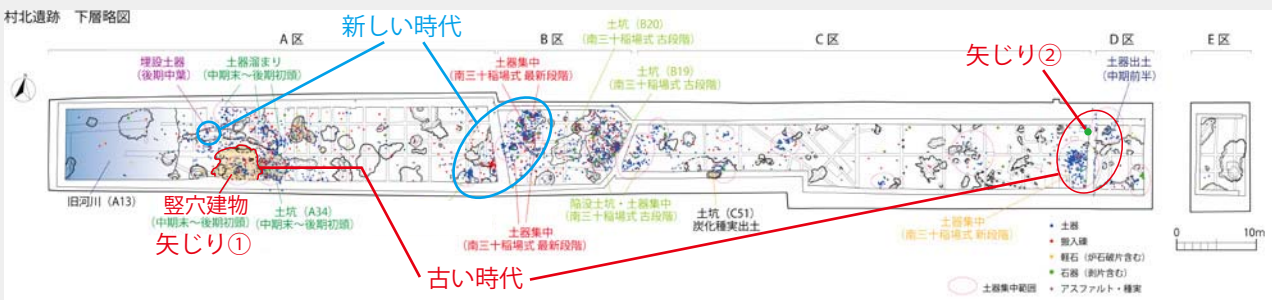


図3 矢じりの出土した位置

村北遺跡で何をしていたのか

1万年もの長い期間つづく縄文時代では、時代が新しくなるにつれて「矢じり」がたくさん使われるようになっていわれています（図4）。

ところが、これまで述べてきたように、村北遺跡では使われる数が少ないうえに、古い時代に使われ、その後「矢じり」離れが進みます。狩りをして、食べものを得るための道具を持たない暮らしとはどのようなものだったのでしょか。

村北遺跡では、もっとも新しい時代（縄文時代後期中葉）には、特殊な土器だけが出土します（前回のイッピン参照）。壺・鉢・異形土器から構成されるこの特殊な土器は、マツリに使う道具であると考えられます。おそらく、村北遺跡では時代が新しくなるにつれて、弓矢を必要としない「マツリ・祈りの場」に変わっていったことが想像されます。

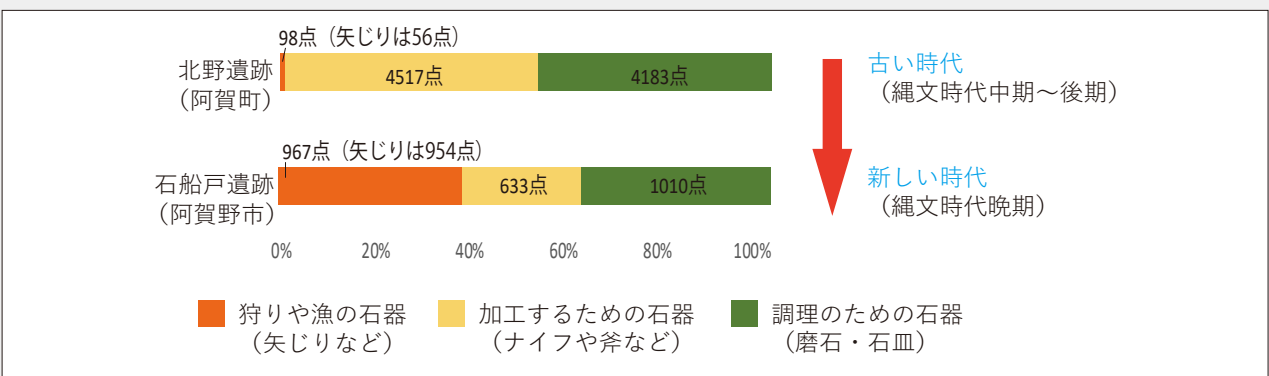


図4 遺跡から出土した石器の割合

<参考文献>

高橋保雄ほか 2005 『北野遺跡Ⅱ(上層)』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
古澤安史ほか 2018 『石船戸遺跡』阿賀野市教育委員会